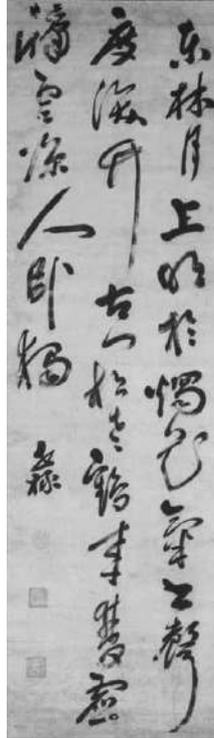


明治・大正期の京都における祝世祿の書の鑑賞について
—栗原コレクション《草書七言絶句軸》の付属品を手がかりに—

笠原綺華

はじめに

ふくやま書道美術館は、芦品郡駅家町(現在の福山市)出身の書家・栗原蘆水(一九三二～二〇一〇)が長年にわたり蒐集した書画篆刻や文房具など三七五点のコレクションを受贈し、平成十五年(二〇〇三)に開館した。その後も度重なる寄贈をいただき⁽¹⁾、令和七年(二〇二五)三月現在で、二、二〇〇点ほどに及ぶ栗原コレクションは、当館の所蔵品の根幹を成している。本稿では、開館記念展「中国の書画と文房—明清の書の世界—栗原コレクションより」⁽²⁾において出品した祝世祿《草書七言絶句軸》(図1)について見ていきたい。



(図1) 祝世祿《草書七言絶句軸》(ふくやま書道美術館蔵)

祝世祿(一五三九～一六一〇)は鄱陽(江西省)の人。字は延之、無功と号した。万曆十七年(一五八九)の進士で、万曆二十三年(一五九五)には南科給事に考選され、のち尚宝司卿に任じられた。陽明学者として名声があり、戸部尚書として官界でも名を馳せた耿定向(一五二四～一五九七)に学んだ。著書に『祝子

小言』一卷と『環碧扇詩集』三巻がある。

祝世祿の書は現存する作品が数少ない。本稿で扱う当館所蔵の《草書七言絶句軸》について青山杉雨氏は、豁達な筆運びを示しており、独自の境地を持った人物であることがよくわかるとし、当時のいづれの系列にも属さないことが、こうした表現を生み出したのであると述べる⁽³⁾。また、後世への影響については、鄱陽に隠棲した朱弁(八大山人・一六二六～一七〇五)の布字と字形を調整する技術がよく似ていることから、朱弁は祝世祿の字を做ったのではないかという説をあげる。

このほか、宮内庁所蔵の双幅《草書七言絶句》⁽⁴⁾や、野村美術館所蔵の《七言詩》⁽⁵⁾、兵庫県立美術館所蔵の《行書五絶》⁽⁶⁾などが知られる。また、村上三島記念館(今治市上浦歴史民俗資料館)所蔵の《草書五言絶句》⁽⁷⁾の書風について、村上三島氏は、日本人の書の中では三輪田米山(一八二一～一九〇八)の書に近いとし、濃厚さの中にさらっとしたところがあると評している。筆については、柔らかな毛の太目のものを使用して、ゆったり横画をきかして書いたものであると推測する。さらに、中国歴史博物館(現在の中国国家博物館)所蔵の《祝世祿行書詩卷》は祝世祿の数少ない小字作品であるが、その書は二王に溯源すると説かれる⁽⁸⁾。

書風については、当時、江南で文徵明(一四七〇～一五五九)や董其昌(一五五五～一六三六)のような繊細優美な書風がもてはやされたのに対し、祝世祿は江西という遠隔の地に生まれたために、法に縛られない重厚で筆力に富んだ大字作品が多いのではないかといい、書風形成に地理的な要因を提示する見方もある⁽⁹⁾。

一方、明治期における祝世祿の書を受容の一面に関しては、西嶋慎一氏の論⁽¹⁰⁾に窺うことができる。そこでは、山田永年(一八四四

（一九一三）が所蔵していた祝世祿の《祝世祿草書五絶真跡一幅》は、永年の著である『過眼余唱』や『枕上騰稿』、『古硯堂詩抄』のいずれにも登場するとされ、愛蔵ぶりが指摘される。そして、永年の祝世祿への傾倒は、書法の芸術性を評価したもので、人をもつて書を論ずる姿勢とは異なる視点が明らかにされている。

以上のように、祝世祿の書は作品ごとに取り上げられてきたものの、明治・大正期において、祝世祿の書がどのように鑑賞され、いかなる言葉で評されたのかについては、検討の余地があると思われる。よって本稿では、ふくやま書道美術館所蔵の祝世祿《草書七言絶句軸》の付属品を手がかりとして、明治・大正期において祝世祿の書がいかに鑑賞され、受容されていたのか、その実態の一側面を明らかにすることを目的とする。

一 栗原コレクションの祝世祿《草書七言絶句軸》

（一）作品本体の概要

本稿で取り上げる祝世祿の《草書七言絶句軸》（以下、本作とする場合がある）は、本紙縦二〇五・〇×横五九・〇cmの紙本に三行で墨書された条幅作品である。筆の運びに勢いを感じられると同時に、息長く、ゆったりとした結体や章法が特徴的な一幅である。太い筆を用いて藏鋒で書いたと思われるが、特に渴筆部分は、筆の動きをよく伝えてくれる。本文は左記の通りである。

【釈文・書き下し】①

東林月上明於燭 東林 月上りて 燭よりも明らかなり
 花氣書声度深竹 花氣 書声 深竹を渡る
 古門松老鶴来双 古門 松老い 鶴の来るは双
 虚牖雲涼人臥独 虚牖 雲涼しく 人の臥するは独り

詩題は不明である。署名の世祿の下には、「世祿」（朱文円印）、「無功父」（白文方印）、「天垣諫議」（白文方印）が用いられる②。なお、二行目三字目「竹」の最終画と、三行目四字目「人」の一画目にかかる紙の継ぎ目がある。継ぎ目をまたぐ筆線に若干のズレが生じており、後世に仕立て直されたことによるものかと思われる。

（二）本作の付属品の整理

次に、本作の付属品について紹介したい。本作には収納箱と包装のほか、題跋が記された純本墨書の卷子が二巻備わる（図2）。本稿では便宜的に、二巻の添書を「添書一」と「添書二」とする。

まず添書一を見ていくと、最初はじめに本作に跋文を寄せたのは谷如意（一八二二～一九〇五）③であり、明治二十八年（一八九五）の二月のこととわかる。跋中において谷如意は、鳩居堂

主人が近ごろ祝世祿の書幅を入手したと記しており、鳩居堂主人つまり八代目当主の熊谷直行（一八四三～一九〇七）が本作を手に入れたのは明治二十八年の二月から遠くないことが推測される。なお、明治八年（一八七五）に行われた七代当主の熊谷直孝（一八一七～一八七五）を偲ぶ追善の大煎茶会の目録『円山勝会図録』④には本作は見えない。谷如意の寄跋後、添書一には、小野湖山（一八一四～



（図2） 本作と付属品（ふくやま書道美術館蔵）

一九一〇）¹⁵、巖谷一六（一八三四～一九〇五）¹⁶、小林卓斎（一八三二～一九二六）¹⁷、江馬天江（一八二五～一九〇二）¹⁸の題跋が見られ、卷子の題箋は小林卓斎による。また、頼山陽（一七八〇～一八三三）の孫である頼潔（一八六〇～一九二九）¹⁹による箱書が備わる。一方で、添書二には、内藤湖南（一八六六～一九三四）²⁰と長尾雨山（一八六四～一九四二）²¹の跋文が認められている。題箋及び箱蓋表書の書き手は署名がなく不明であるが、同一人物の筆跡と推される²²。なお、大正十年（一九二二）十月の長尾雨山跋には所蔵者について記述がないが、同年四月の内藤湖南跋には記述が見られ、熊谷直行が没した後も含め、少なくとも約二十六年の間は鳩居堂所蔵であったことがわかる。

付属品の整理として、執筆時期と筆者などをまとめた【表】。なお、箱書や題箋は含めていない。

年月	筆者	内容
明治二十八年（一八九五）二月	谷如意	跋（添書一）
明治二十八年（一八九五）十二月	小野湖山	跋（添書一）
明治二十九年（一八九六）七月	巖谷一六	題（添書一）
明治三十二年（一八九九）四月	小林卓斎	跋（添書一）
明治三十二年（一八九九）四月	江馬天江	跋（添書一）
大正十年（一九二二）四月	内藤湖南	跋（添書二）
大正十年（一九二二）十月	長尾雨山	跋（添書二）

二 題跋に見る近代文人の祝世禄の 評価

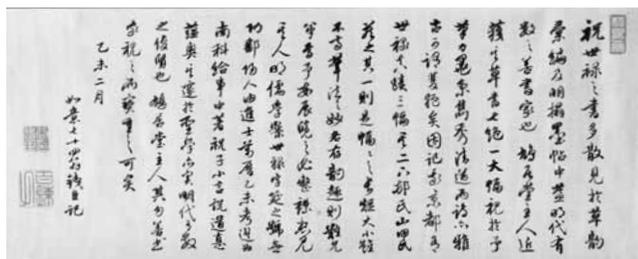
ここでは、本作に寄せられた題跋を翻刻し、解説する。明治・大正期において、本作がいかに鑑賞され、評されていたのかについて、付属品における記述を手がかりとして考察を試みたい。

（一）添書一

添書一において、はじめの寄跋者である谷如意は明治二十八年に次のように跋を記す（図3）。

祝世禄之書、多散見於草韻彙編及明搨墨帖中。蓋明代有数之善書家也。鳩居堂主人近獲其草書七絶一大幅、視於予。筆力墨氣、雋秀、清適、而詩亦雅古、可謂及絶矣。因記我京都有世禄真跡三幅、其二下村氏、山田氏藏之其一則。是幅々之長短大小、雖不高筆法之妙、各存韻趣、則難兄弟焉。予每展覧之必整襟想見其人。明儒学案、世禄字延之、号無功、鄱陽人。由進士、万曆乙未考選為南科給事中。著祝子小言、說道真濫輿、其遂於聖学、亦実明代有数之俊賢也。鳩居堂主人、其勿善書家視之、而宝重之可矣。乙未二月、如意七十四翁鉄臣記。「谷鉄臣印」（白文方印）・「百鍊父」（朱文方印）

「祝世禄の書は、多くは『草韻彙編』や明搨墨帖中に散見す



（図3） 谷如意的跋

る。思うに明代有数の優れた書家である。鳩居堂の主人は近ごろ祝世祿の草書七言絶句の大幅を手に入れ、私に鑑賞させた。筆力や墨の色つやがよく生氣に満ち、ぬきんでて優れており、清らかで力強く、そして詩も雅やかで古風であり、書と詩の双方が極めて優れていると言える。そこで我が京都にある祝世祿の真筆三幅について記すと、その二幅は下村氏と、山田氏が所蔵する。これは長短大小様々であり、たとえ筆法の妙が高くないとしても、それぞれに独自の趣があり、優劣つけがたい。私は鑑賞するたびに必ず襟を正し祝世祿という人物を想像する。『明儒学案』によると、祝世祿は字を延之、号を無功といい、鄱陽の人である。進士に合格し、万曆乙未年（一五九五）の考選で南科の給事中となった。『祝子小言』を著し、道の本質的な奥義を深く説き、その儒学に深い造詣があり、また実に明代でも屈指の俊英であった。鳩居堂の主人は、どうか優れた書家と見て、この書を重宝してくださいませよう。乙未（一八九五）二月、如意七十四翁鉄臣記す。」

谷如意は本作を見て、書の筆力や墨色のよさに着目すると同時に、詩についても雅やかであると、書と詩の双方について高く評価する。このように書と詩を評価する

姿勢は、翌年の七月に、如意跋の前に書かれた巖谷一六の題「詞翰双絶、墨林奇宝。」「詩と書双方の才能が並外れて優れており、書の世界における稀有な宝である。」（図4）や、後に触れる小林卓斎の跋中にも見られる。



(図4) 巖谷一六の題

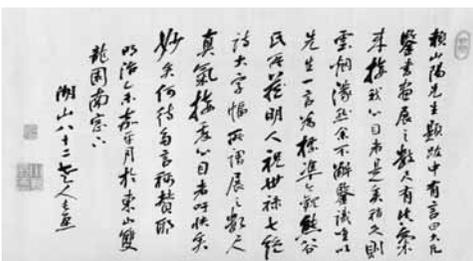
また、書幅を鑑賞するたびに襟を正し、祝世祿という人物を想像するという一節からは、如意が尊敬の念を抱き、その書を鑑賞していた様子が窺える。敬意をもって書を見た背景には、祝世祿が儒学に精通していることや、明代における俊英であることなどが関係していると思われる。

さらに本跋で注目されるのは、当時、京都に伝わる祝世祿の書幅が三幅あったという記述である。そのうちの一幅は下村氏つまり下村正太郎（十一代・号は正剛）（一八八三—一九四四）²³が、またもう一幅は山田氏つまり山田永年が所蔵していたと記す。下村氏と山田氏が所蔵していた祝世祿の書幅については、三章で触れたい。

如意跋に続き、小野湖山が次のように跋する（図5）。

頼山陽先生題跋中有言曰、大凡鑑書画展之数尺、有真氣来接、我心目者是矣、稍久則雲煙濛然。余不解鑑識、唯以先生一言為標準。今觀熊谷氏所藏明人祝世祿七絶詩大字幅。所謂展之数尺、真氣接我心目者、吁、快矣。妙矣。何待多言称賛耶。明治乙未嘉平月於東山双龍園南窓下。湖山八十二老人長愿。「愿賜硯清宵月」（白文方印）・小野長愿（白文方印）

「頼山陽先生の題跋中にある言葉によると、「おおよそ書画を鑑定するのに数尺展^びげて、真氣



(図5) 小野湖山の跋

が出るものは、私の心目に本物は間違いないが、長い間見ていると雲や煙がかかるようにわからなくなってしまう。」という。私は鑑識がわからないため、ただ頼山陽先生のこの言葉を基準とする。今熊谷氏が所蔵する明代の祝世禄の七言絶句の大字書幅を観た。いわゆるこれを数尺広げてみると、真気が感じられ私の心に迫ってくるのは、ああ、なんと心地のよいことか。素晴らしい。どうしてこれ以上言葉尽くして賛美する必要があるうか。明治乙未十二月、東山の双龍園の南の窓の下にて。湖山八十二老人長愿。」

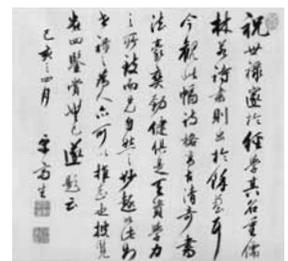
湖山はここで、頼山陽の跋文の一節を引用しつつ、祝世禄の書を観た際の感動を記している。引用された跋は、頼山陽が明末清初の画家である朱軒（一六二〇～一六九〇）の水墨山水幅に題した一節にほぼ一致する⁽²⁴⁾。湖山は祝世禄の書幅を目の前にした際、山陽が提唱するように、心に迫るものがあるか否かという視点で観たのである。言葉を尽くす必要がないと述べるように、いわば、直観的にその書のよさを感じたことが窺える。

なお、湖山が本作を観た双龍園とは、湖山が静養するため手に入れた京都東山麓の庭園のことである⁽²⁵⁾。庭園には二本の老松があり、その姿が龍のようであったため、「双龍園」と名付けたという。湖山や谷如意、江馬天江などの老詩人が時折会合していたらしく⁽²⁶⁾、本作もそのような交流の中で鑑賞されたものと想像される。

次に、明治三十二年（一八九九）に記された小林卓斎の跋（図6）を確認しよう。

祝世禄、邃於经学、其名重儒林、若诗书则出於余芸耳。

今觀此幅、詩格高古清奇、書法豪爽勁健。俱是天資学力之所致、而見自然之妙趣如此、則世禄之為人亦可以推知也。披覽數四、鑑賞無已、遂題云。己亥之四月、卓齋生。「小林卓蔵」(白文方印)・「此間有真意」(白文方印)



(図6) 小林卓斎の跋

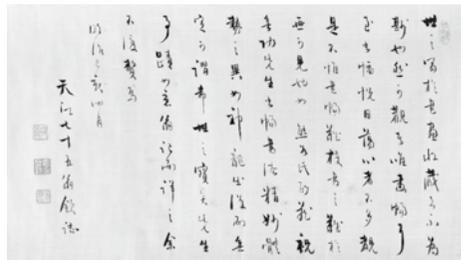
「祝世禄は、經学に深く通じており、儒学者として名声が高く、詩や書は余技から出たものにほかならないようである。今この書幅を観ると、詩の格調は高く古風でぬきんでて品がよく、書法は豪快で力強い。ともに天性の才能と学問の力によって成し遂げられたものであり、しかも自然な妙趣をこのように見て、世禄の人となりもまた推し量ることができる。何度も見返して、鑑賞して飽きることがないので、ついに題字を記す。己亥（一八九九）の四月、卓齋生。」

經学とは、儒家の作った經典を研究する学問のことである。卓斎は祝世禄の詩や書について、余技として身につけたものと認識しながらも、前述の通り、詩と書の双方を高く評する。そして、根底には天性の才能と学力とを見出す。その上で、詩と書に現れた自然な妙趣が、人となりまでも推量させると述べており、こうした態度は、先に見た如意跋における「鑑賞するたびに必ず襟を正し祝世禄という人物を想像する」と類似するものと言える。書を表面的に見るのではなく、作者の内面を映すものとして捉え、書と人となりを結びつけて鑑賞す

る書法観が窺える。

また、同年には江馬天江が跋を寄せている(図7)。

世之富於書画收藏者、不為尠也。然可觀在唯書幅耳至書幅悦目蕩心者、不多。觀是不惟書幅難獲、書之難於無可見也如。熊谷氏所藏祝無功先生書幅、書法精妙、體勢之異如神龍出沒而無定。可謂希世之寶矣。先生事跡如意翁記而詳之、余不復贅為。明治己亥四月、



(図7) 江馬天江の跋

天江七十五翁欽誌。「很翁」(朱文方印)・「馬聖欽印」(白文方印)・「永弼氏」(朱文方印)

〔世の中には書画を豊かに收藏する者は、少なくない。しかし観るに値するのはただ書幅だけであり書幅については目を喜ばせ心を揺れ動かすものは、多くない。これはただ書幅を手に入れるのが難しいだけでなく、書の難しさは見るべき書幅がないことにおいてもでもある。熊谷氏所蔵の祝無功先生の書幅は、書法が精妙で、姿態の変化は神龍が出没するよううで、とどまることがない。希代の宝と言える。祝世禄の事跡については如意翁が詳しく記しているので、私は余計にまた書くことはしない。明治己亥四月、天江七十五翁誌す。〕

本跋において天江は、書画のうち、特に書を重視する芸術観を記している。また、書においても、心が揺れ動くほど優れた書を観ることや手に入れることはさらに困難であると述べる。こ

のように、優れた書に出会うことの難しさながらも、本作の書法の精妙さと姿態の変化を高く評価し、稀少性の高さをよく伝えてくれる。

以上が添書一に見られる跋文である。なお、添書一の題箋には、「題祝世禄書幅諸家文巻 卓翁題箋」(図8)と見え、卓翁が跋を寄せた明治三十二年(一八九九)に書いたものと思われる。また、明治四十三年(一九一〇)には、頼潔によって、添書一の収納箱の蓋表に「題祝世禄書幅諸家小品文横巻」(図9左上)と題され、蓋裏には「康戌立春前一日頼潔題」(図10)と記されている。よって、二月四日頃の箱書と思われる。



(図8) 添書一の題箋



(図9) 本作と添書の箱蓋表(右: 本作の箱 左上: 添書一の箱、左下: 添書一の箱)



(図10) 添書一の箱蓋裏

(二) 添書二

次に、添書二における跋文を見ていこう。本巻には、大正十年(一九二二)四月に書かれた内藤湖南の跋(図11)がはじめに見える。

祝無功、明史無伝、其仕履略出於明儒学案。蓋講学之人、奉陸王之教者也。余閱李氏藏書及昭

代典則二書、並有無功序、因以知其与焦弱侯、李卓吾諸人有交。其論明代史家、黜東莞、京山、毘陵、弇州、而進鄭端簡、亦具特識。其書在彼間伝者甚希、而我邦則往々有其擘窠大字草隸、遠祖長史。近出京兆、瑰奇雄偉、邈然罕儔。平安鳩居堂所藏七絶書軸、詩用仄韻、險側奇秀、書法亦称之。前輩題跋已備、余亦聊書所見、以付于簡末云。大正十年四月、内藤虎書。于洛東僑居之宝馬齋。「藤虎長寿」(白文方印)

「祝世禄は、『明史』には伝記がなく、その経歴は『明儒学案』に載る。思うに講学の人で、陸九淵や王陽明の教えを奉じた者である。私は李氏の藏書や『昭代典則』の二書を読み、いづれにも祝無功の序文があることから、彼が焦竑(一五四〇〜一六二〇)や、李贄(一五二七〜一六〇二)らのあらゆる人と交流したことを知った。祝世禄の明代の史家についての論は、東莞、京山、毘陵、弇州(2)を退けるが、鄭曉(一四九九〜一五六六)を推すもので、また独自の識見を備えていない。祝無功の書は、中国本土では伝わるものが極めて少ないが、日本ではしばしば大きな文字で書かれた草隸の書が見られ、遠くは張旭(生没年不詳)を祖とする。近ごろ北



(図11) 内藤湖南の跋

京で見つかった書は、非常に珍しく雄大で、他に比べるものがない。京都の鳩居堂所蔵の七言絶句の書軸は、詩は仄韻を用い、險しくも変化に富み、奇抜で秀でており、書法もまたこれに相応しい。先人の題跋がすでに揃っているが、私もまたわずかな考えを書き記し、この簡末に添えることとする。大正十年四月、内藤虎記す。洛東の仮住まいの宝马齋にて。」

湖南跋は特に、書風に関する具体的な言及が注目される。祝世禄の書は中国では伝わるものが少ない一方で、日本では大字の草隸の書がしばしば見られると言う。湖南が述べる「草隸」とは、どのような書体であろうか。管見の限りでは、祝世禄の隸書作品は確認されない。ここではおそらく単に草書を、あるいは隸書を思わせる筆鋒によって書いた草書を指していると推される。

また、湖南は、祝世禄の書の祖として張旭を挙げ、その影響を示唆する。張旭は唐代における狂草の名手であり、字の大小や、長短斜正など変化に富み、連綿を多用した草書を書いたことで知られる。祝世禄の自由自在に変化する書を、張旭の書に重ね合わせたのであろう。本跋では、祝世禄の書の来源として張旭をあげる、湖南の祝世禄観が明らかとなった。

一方で、湖南跋の後に綴られた長尾雨山の跋文(図12)には、湖南と異なる見解が見られる。大正十年十月の跋である。

祝世禄、字無功、一字廷之、号石林、又号寄々斎、鄱陽人。万曆己丑進



(図12) 長尾雨山の跋

士、其同年出身焦竑、董其昌、高攀龍皆為名士。耿定向講學東南、其說本王守仁。世祿從之學、与潘去華、王德孺同為耿門高弟。著有祝子小言、環碧扇詩集。其書筆力矯々、勢如游龍。蓋出東坡、別成一家。余每謂、學人書勝於書家書、以其有書卷氣也。今見此幀、蓋信余言之不謬也。辛酉十月、兩山居士長尾甲。「兩山」(白文方印)・「長尾甲印」(白文方印)

「祝世祿は、字を無功、別の字を廷之といい、石林と号し、また寄々齋とも号した、鄱陽の人である。万曆己丑の年(一五八九)の進士で、その同年出身の焦竑、董其昌(一五五五～一六三六)、高攀龍(一五六二～一六二六)はみな名士となった。耿定向は東南の地で学問を講じ、その学説は王守仁(一四七二～一五二九)を根本とする。世祿は耿定向に従って学び、潘去華(一五三七～一六〇〇)や、王德孺(生没年不詳)とともに同じく耿門の高弟となった。著書に『祝子小言』と、『環碧扇詩集』がある。祝世祿の書は筆力が強く、筆勢は龍が自由自在におよぐようである。思うに蘇東坡(一〇三七～一一〇二)から出て、独自に一家を成している。私は常々言うが、学問のある人の書は書家の書よりも優れており、そして教養のある人の書には書卷の気が宿っているのである。今この作品を見て、私の言葉は間違いでではなかったことを確信したのである。辛酉(一九二二)十月、兩山居士長尾甲。」

王守仁を根本とした学説というのは、陽明学のことである。祝世祿は耿定向に学び、高弟となった。このように兩山が、祝世祿の経歴を細かく記す態度には、学問を重んじるまなざしが見てとれる。

書については、筆力の力強さに着目し、筆勢は龍が自由におよぐようであると評し、北宋四大家のひとりとして名高い蘇軾の書から

出ていると言う。その上で、蘇軾の書とは異なった独自の書風を確立したことを評価している。このような見方は、湖南が祝世祿の書源に張旭を挙げた書観と異なり注目し値する。ここで兩山が蘇軾の書と結びつけたのは、おそらく山田永年の著「過眼余唱」(明治十四年刊)における「余、觀其手書、梁千秋印鑄、草訣辨疑等序。書法似学坡翁者。」「私は、祝世祿が書いた、梁千秋の『印鑄』、『草訣辨疑』等の序文を見た。書法は蘇東坡の書を学んだようである。」という記述を踏まえた見方であると思われる。

さらに、兩山の見解で興味深いのは、「学問のある人の書は書家の書よりも優れており、そして教養のある人の書には書卷の気が宿っているのである。」と言う一節である。ここまで見てきた諸人の跋では、祝世祿の学問や教養があることについて言及し、その書と人となり結びつけて評する書観が確認された。しかし、兩山の考えはさらに一步踏み込んで、学者の書を書家の書より優れたものとして位置付ける。これについては常々提言していると述べており、学問や教養を通して培った書卷の気が感じられる書を兩山は日ごろから高く評価していたことが窺える。そして、幼い頃から漢学を修めた兩山自身も、学問に裏付けされた書法を理想としていたのではないか。以上が添書二に記された跋である。前述の通り、本巻の題箋及び箱蓋表の書き手は不明であるが、同一人物の筆跡と推され、いずれも「題祝世祿書幅諸家文卷」(図13)と記されている。



(図13) 添書二の題箋

(三) 本作の箱書

ここでは、本作の箱書に着目したい。

まず、箱蓋表は小野湖山によって「明祝世祿東林月上詩大字幅 湖山八十二叟小野愿題籤」(図9右)と題されている。八十二歳時と記しており、寄跋時の年齢と一致する。

次に、箱蓋裏には巖谷一六と江馬天江の箱書(図14)がある。一六は、「明治二十九年丙申新秋、観于西京柳池寓楼。一六巖谷修。〔明治二十九年(一八九六)丙申新秋(七月)、西京柳池寓楼において観る。一六巖谷修。〕と記しており、一六も寄跋時に書いたであろう。



(図14) 本作の箱蓋裏

一方、天江は、「余嘗枝^{マツ}先生所書朱子範寿序長卷秘珍已久矣。与此幅并展对照以樂焉、不覺移晷也。天江欽又誌。〔私はかつて枝先生が書いた朱子範寿序の長巻を秘蔵して久しい。この書幅と並べて広げ対比して楽しんでるうちに、日が経つのも忘れてしまった。天江また誌す。〕と記している。

興味深いのは、天江がかつて所蔵していた「枝先生」の書いた朱子範寿序長巻と並べて展観したという点である。枝先生とは誰を指し、「朱子範寿序」とはどのような書であろうか。結果として、本稿では詳らかにすることはできなかったが、現時点での調査結果を左にまとめておきたい。

まず、『遺馨録』上巻に江馬天江所蔵として「祝世祿書朱子範寿序一軸」と記載がある⁽²⁹⁾。祝世祿の書いた朱子範寿序を天江が所蔵して

いたことがわかり、箱書における「枝」字は「祝」と読む可能性が考えられる。しかし、『遺馨録』での「軸」という形式は、箱書に見られた「長巻」つまり長い卷子という作品形態についても合致せず、同一作品であるのか疑問が残る。

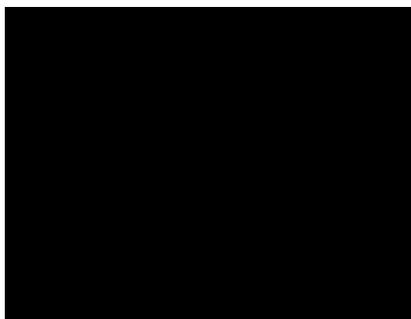
次に、東京文化財研究所の「売立目録作品情報」データベースに祝世祿の書として記載のある「寿朱子範序墨跡／桂谷題」について記しておきたい。この売立は小室翠雲(一八七四～一九四五)の所蔵品入札で、大正十四年(一九二五)、東京美術倶楽部において行われたようである。『小室翠雲氏所蔵品入札目録』(東文研番号・美研1003)に図が載る祝世祿の墨跡は現在、小平市中央図書館に平櫛田中文庫として、所蔵されていることがわかり、閲覧の機会をいただいた⁽³⁰⁾。

その書は本紙縦三〇・二×横三九・九cmの折本で九葉にわたる。「寿朱子範七十序」という題からはじまり(図15)、巻末には祝世祿の款記(図15-1)がある。それによると、万曆二十七年(一五九九)の八月に書いたもので、祝世祿が六十一歳頃の書とわかる。内容は朱子範という人物の孝行について書かれたものかと思われる⁽³¹⁾。

帙の題箋(金箋墨書)には「明祝世祿寿朱子範序墨跡 幼節署検」とあり、上海出身の篆刻家である蔣節(一八四四～一八八〇)によるものとわかる。外箱の蓋表には明治・大正期の日本画家の下条桂谷(一八四二～一九二〇)が「明祝世祿寿朱子範序」(図15-2)と書く。左下の貼紙に書かれた「一四三二」の番号は目録の作品番号と一致する。また蓋裏に「祝世祿、字無功、号石林、豫章人。万曆癸丑進士。詩文光被一世。而此書自古篆隸中来、鳳翥龍蟠、奔逸超純、予所親以此為最取乙卯夏、桂谷誌。」と記され、大正四年(一九一五)夏の箱書とわかる。桂谷はここで、祝世祿の書について、古代の篆書や隸書から生まれ

たものであり、鳳凰が自在に飛び、龍がとぐるを巻いて絡み合うように筆勢に活気があり、思い通りに変化していると述べる。鑑識眼にも優れ、東京帝室博物館（現在の東京国立博物館本館）の評議員も務めた桂谷であるが、この作品は桂谷が見てきた中で最も優れたものであるとして高い評価を与えている。

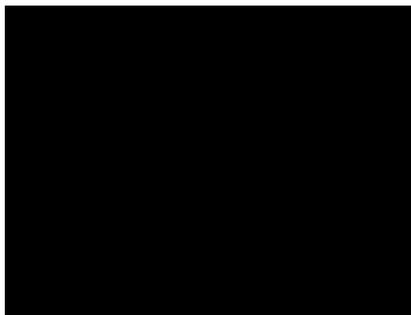
以上が「朱子範寿序」に関する現段階での調査結果である。祝世祿の書として伝わる「朱子範寿序」の書は、文献上での記載を含め複数の存在が確認できた。また、天江が祝世祿の「朱子範寿序」を所蔵していたことも窺えた。これらを踏まえると、本作の箱書における「枝」字は、「祝」字と釈すべきかもしれない。ここにその可能性を記しておきたい。



(図15) 明祝世祿寿朱子範序墨跡
(小平市中央図書館平櫛田中文庫蔵) 巻頭



(図15-2) 箱蓋表における
下条桂谷の題



(図15-1) 巻末

三 明治期の京都における祝世祿の書

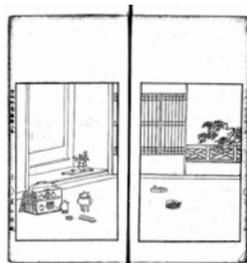
本章では、明治期の京都において、祝世祿の書がどのように受容されていたのかについて考察を試みる。

まず、本作は、題跋が寄せられる以前に、諸人の目に触れている。と言うのも、明治十二年（一八七九）五月十八日に葉山堂主人・杉田竹香供養のため、息子尚綱によって京都東山で開催された煎茶会において本作が展覧されたことが、翌年に発行された『雲烟供養図録』⁽²⁾によって確認できる。本図録には江馬天江や谷如意、山中信天翁、小林卓斎、頼支峰（一八三三〜一八八九）の跋文、富岡鉄斎（一八三六〜一九二四）の題字などがあり、雅会には多くの文人が集ったことがわかる。

『雲烟供養図録』上巻によると、本作は第二席本席の掛幅として陳列されたようである。亭主は「鳩居堂」及び「在棟堂」の名がある（図16-1）。挿図からは、床の間に掛けられ、煎茶道具とともに嗜まれた様子が想像される（図16-2）。また、谷如意が龍や蛇が躍動するようであると記し、筆勢に注目した評語を寄せている（図16-3）。本作は、明治期の煎茶会においても、



(図16-3) 『雲烟供養図録』上巻
六葉裏・七葉表



(図16-2) 『雲烟供養図録』上巻
十葉裏・十一葉表

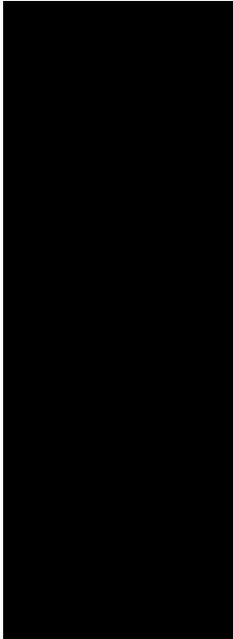


(図16-1) 『雲烟供養図録』上巻
十葉裏・十一葉表

多くの文人らに親しまれていた書と言えよう。

次に、前章で見た如意跋の記述の一節を見ていきたい。先述の通り、如意は、京都にある祝世禄の書として三幅挙げ、そのうち二幅は下村氏と山田氏の所蔵と述べていたが、山田永年の『過眼余唱』においても、下村氏が祝世禄の書幅を所蔵していると記されており、明治十四年（一八八一）の時点ではすでに下村氏の所蔵となっていたことがわかる。

このように、明治期においても祝世禄の書として三本指に数えられた貴重な一幅は、現在、野村美術館所蔵となっている『七言詩』（図17）⁽³³⁾のことと推測される。本幅は明治四十三年十一月二十五日に京都美術倶楽部において行われた書画骨董競売に売りに出され、『下村正太郎氏御所蔵品目録・第一回』に「祝世禄書真跡」として掲載されている⁽³⁴⁾。当時の下村氏の状況については、相談相手であった市島謙吉（春城）氏の日記などから窺えると言い、下村正太郎（十二代）によってまとめられている⁽³⁵⁾。祝世禄の書幅も、家業再建にあたる中で、やむなく売りに出したのであろう。



（図17）祝世禄筆 七言詩（野村美術館蔵）

この競売において書幅は、京都市野村徳七（一八七八～一九四五）氏に一万七千円で落札されている⁽³⁶⁾。野村氏は当時評判の高かった祝世禄の書を何とかして入手しようと、理事の柴山氏を連れて京都に赴いたそうである。柴山氏から聞いた当時のエピソードが綴られており⁽³⁷⁾、興味深いため少々長くなるが引いておく。

（前略）見るとその頃評判の高かった祝世禄である。これは下村正太郎氏の入札展観で、道具屋の今貞もやつて来てゐる。野村氏は『これを何とかして手に入れたいのだが、柴山君君一つ値をつけて呉れないか』といふ。それには柴山氏も困つたが、何とか返答しなければならぬので、別に深くも考へず『一字五百円でどうでせう』と答へた。本文の七言絶句が二十八字、祝世禄の三字を加へて三十一文字、それに何やかやを加へると、総計三十七八字になる。一字五百円として先づ二万円足らずの代物である。ところが結局それで手に這入つた。何しろ日本に三本渡つて来て、一本は帝室博物館にあり、他の一本は行衛不明で、残る一本がこれだといふのだから、落札日の野村氏の喜び方といふものは、それこそ大変であつた。―以上は柴山氏の直話をそのまま筆録したものである。

（中略）この幅が当時非常な評判であつたといふのは、そこにいろいろの事情もあつたであらうが、祝世禄といふ字面及字音が、縁起をかつぐ人たちの間に、大いに持て囃されたからであらう。（以下略）

一万七千円とは当時としては相当の高値であつたそうで、野村氏が高いものを買うという度胸を知る機会となり、コレクション形成の皮切りとなつたと言ふ⁽³⁸⁾。

下村正太郎氏から野村徳七氏へと受け継がれた後は、大正元年

(一九二二)に出版された『群芳清玩』第一冊に「七絶草書」として掲載されるほか、大正三年(一九一四)には『書苑』四卷第五号に滑川澹如(一八六七〜一九三六)の解説とともに縮写の図版が載る。昭和十一年(一九三六)には大阪市立美術館の開館を記念して開催された展覧会において展示されたことが『開館記念明宝展観図録』から窺える³⁹。昭和五十九年(一九八四)以降は、野村徳七氏のコレクションをもとに開館した野村美術館に『七言詩』として所蔵されている。

一方、山田氏の所蔵する書幅とは、山田永年が愛蔵した草書五絶の一幅であろう。『過眼余唱』の記述⁴⁰によると紙本墨書であり、縦四尺七寸二分(約一四三cm)、横一尺五分(約三二・八cm)というが、現在のところ、行方は不明である。永年は京都における祝世禄の書幅として、曼殊院所蔵の書幅(現在宮内庁所蔵)と下村氏の書幅(現在野村美術館所蔵)、そして山田氏所蔵の書幅をあげている。

よって、谷如意の跋の内容とあわせて見ると、明治期において祝世禄の書として京都で知られていたのは、この三幅と、現在当館が所蔵する『草書七言絶句軸』であったことがわかる。永年が本作の存在を知り得なかつた点については疑問が残るが、本作は題跋が備わる以前から、京都の煎茶会などにおいて文人らに親しまれたことが明らかとなった。

おわりに

本稿では、栗原コレクションの祝世禄『草書七言絶句軸』の付属品を手がかりとして、明治・大正期において、祝世禄の書がいかに鑑賞されたのかについて考察した。

結果として、題跋文には、祝世禄の詩と書の双方を高く評価

する語が散見され、特に書については、書法の技術のみを観るのではなく、その根底に儒学者としての深い学を見出す書観が窺えた。中でも長尾雨山は、学人の書には書卷の気が反映され、書家の書より優れるという独自の見解によって、祝世禄の書を高く評価していた。また、祝世禄の書の来源として、内藤湖南は唐代の張旭を、長尾雨山は宋代の蘇軾と結びつけ、両者は異なる視点で本作を鑑賞したことが明らかとなった。

以上のように、題跋の翻刻を通して、本作が明治・大正期において、文人らの間で高く評価されていたことがわかった。書幅本体はもちろんのこと、祝世禄に対する文人らの書観を窺い知ることができる付属品の重要性は極めて高い。

本作は明治期の煎茶会においても親しまれ、文人らの目に触れ鑑賞されてきた。そして収蔵家であった鳩居堂の熊谷氏と、文人らの交流のなかで題跋という新たな価値が付与され、今に伝えられてきた貴重な作品であると言えよう。今後は本稿で解明に至らなかつた点や祝世禄作品の調査、大字と小字の書風比較などを通して、祝世禄の書についてより多角的に調べを進めたい。

【謝辞】

本稿執筆にあたり、次の方々から多大なるご協力を賜りました。ここに記し、感謝の意を表します。(順不同)

岡朝子氏(小平市中央図書館)

柴田朋彦氏(小平市中央図書館)

三井田紫氏(小平市中央図書館)

沈伯陽氏(中華民国篆刻協合理事)

奥村厚子氏(野村美術館)

剣持翔伍氏(兵庫県立美術館)

【図版出典】

- 〔図1〕～〔図14〕秋山嘉邦氏撮影
 〔図15〕～〔図15+2〕小平市中央図書館にて筆者撮影
 〔図16+1〕～〔図16+3〕国立国会図書館デジタルコレクションより
 〔図17〕野村美術館より提供される

註

- ① 平成十五年から平成二十一年（二〇〇九）までに栗原蘆水氏から受贈した作品は、一三五七点である。氏の没後平成二十三年（二〇一一）には、妻の美菜氏より、蘆水氏の作品を含む八四二点の寄贈を受けた。
- ② 「ふくやま書道美術館開館記念 中国の書画と文房―明清・書の世界―栗原コレクションより」『ふくやま書道美術館編集・発行、二〇〇三』を参照。
 青山杉雨編著『明清書道図説』（二支社、一九八六）八二―八三頁参照。
 宮内庁侍從職編『御物聚成』書跡Ⅱ（朝日新聞社、一九七八）に図版掲載（図版番号九十九・一〇〇）されており、別冊に中田勇次郎氏の解説がある。
 松阪富美子「得庵と煎茶」野村美術館学芸部編『野村得庵の文化遺産』（思文閣出版、二〇一三）三四頁参照。
- ③ 『兵庫県立美術館 年報』（兵庫県立美術館、二〇二四）、蘇士澍主編『書法叢刊』総第二〇二期（文物出版社、二〇二四）五十二頁参照。
 青山杉雨ほか編『中国書法名蹟』（毎日新聞社、一九七九）の図版番号五十一を参照。別冊二十八頁に村上三島氏の解説が載る。
- ④ 中国歴史博物館編『中国歴史博物館藏法書大観』第十三卷 明代法書（柳原書店、一九九六）を参照。韓富林氏・朱敏氏・張燕燕氏・易蘇昊氏による解題及び釈文があり、祝世禄の書については、二四七頁に解説（富田淳氏訳）がある。
 鈴木大洋保・弓野隆之・菅野智明編『中国書人名鑑』（二支社、二〇〇七）一四七頁。
 西嶋慎一「山田永年の書学―明治初期、京都における書学鑑識の側面―」『大東書道研究』（大東文化大学書道研究所、二〇〇八）七十九―九十二頁参照。山田永年は、名を鈍、字は子静、永年居士と号した。京都の商家であるが、古書の癖があり、蒐集において神田香巖と並び称せられた。
- ⑤ 書き下しは前掲註②。掲載の福本雅一氏・田上恵一氏によるものを参照した。印影については、早稲田大学図書館の古典籍総合データベースにおいて、鳥羽希聡編『摺印補遺』（二八三四）が公開されており、本作に押された印文と同じ「無功父」（白文方印）、「天垣諫議」（白文方印）の二顆が見える。https://www.wul.waseda.ac.jp/koteneki/html/bunko31/bunko31_e0716/index.html
- ⑥ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ⑦ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ⑧ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ⑨ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ⑩ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ⑪ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ⑫ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ⑬ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ⑭ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ⑮ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ⑯ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ⑰ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ⑱ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ⑲ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ⑳ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㉑ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㉒ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㉓ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㉔ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㉕ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㉖ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㉗ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㉘ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㉙ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㉚ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㉛ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㉜ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㉝ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㉞ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㉟ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㊱ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㊲ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㊳ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㊴ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㊵ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㊶ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㊷ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㊸ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㊹ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㊺ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㊻ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㊼ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㊽ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。
- ㊾ 頼山陽は頼支峰の第一子であり、頼山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三、庫山と号した。
- ㊿ 頼山陽は近江国に生まれ、本姓は下坂。名は聖欽、字は永弼、通称は俊吉。医学を修めて、江馬榴園の養子となり、仁和寺宮侍医を務めた。後に大坂に出て、緒方洪庵らに師事し、維新时期には兄板倉槐堂や山中信天翁、谷如意らと国事に奔走した。明治元年（一八六八）には新政府の太政官として出仕し上京するも、翌年に致仕して京都に戻り、私塾を開いて儒学を講じた。明治十七年（一八八四）には小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に移り住んだ。

(20) 内藤湖南は秋田県の儒者の家に生まれた。名は虎次郎、字は炳卿、湖南は号である。明治二十年(一八八七)に上京後、『明教新誌』の編集者となり、『万報一覽』や『日本人』などの新聞や雑誌などの編集を手掛け、明治二十七年(一八九四)には大阪朝日新聞の記者となった。明治三十年(一八九七)からは台湾に渡り『台湾日報』の主筆となる。一方で中国研究への造詣も深く、明治四十年(一九〇七)からは京都帝国大学史学科で東洋史を担当した。書については、王羲之から唐の大家、日中の古写経や空海、貫名菘翁などの帖学を正統として高く評価し、これを外れる書法には厳しい姿勢をとった。

(21) 長尾雨山は讃岐高松藩士の子として生まれた。名は甲、字は子生、通称模太郎、雨山のほかに石隠と号した。東京帝国大学文学部古典講習科を卒業し、講習院や、東京美術学校、東京帝国大学文学部などで教鞭を執る一方で、美術雑誌『國華』の編集も手がけた。東京美術学校設立時には岡倉天心とともに尽力し、監査委員に委嘱され、特に中国美術の選別にあたった。明治三十六年(一九〇三)に上海の商務印書館の招聘に応じ、十年にわたり各種の書籍の編集を担当した。大正三年(一九一四)の帰国後は、京都に居を定め、詩書画を専らとした。生涯を通じて鄭孝胥や呉昌碩、内藤湖南、犬養木堂など、當時の日中を代表する文人らと交わった。

(22) 添書二の題箋と箱書のほか、巖谷一六や谷如意、小野湖山、小林卓斎、江馬天江の経歴を書いた一枚の添書がのこる。

(23) 『文庫創設者を語る「下村文庫」下村正太郎について』『早稲田大学図書館紀要』巻三十(早稲田大学図書館、一九八九・二〇五～二〇七頁参照)。

(24) 竹谷長二郎『頼山陽書画題跋評釈』(明治書院、一九八三・九十六～九十八頁)題朱軒水墨山水幅」参照。なお、頼山陽の跋文では「雲霧濛然」のところが湖山は「雲煙濛然」としているが、一字以外は一致する。

(25) 詳しくは『天則』第八編第十一号(哲学書院、一九九五・四十六頁参照。湖山の庭園に対し、三条実美(一八三七～一八九一)から賜った「高臥東山」の四文字を題材にした五言律詩が載る。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1571488/1/25>(二〇二五年三月十日最終閲覧)。

(26) 山田無文編『岷翁老師遺藁』(天竜寺、一九五七)二〇五頁参照。

(27) 東莞、京山、毘陵、弇州はいずれも中国の地名。

(28) 字の「くずしから「枝」字と読めるが、後述するように「祝」字の可能性もある。

(29) 山本復一編『遺馨録』(一八八〇)上巻十五葉表参照。なお、十五葉裏には、読書室蔵として、「祝世禄行書七絶一軸」も見える。

(30) 平櫛田中(一八七二～一九七九)が生涯をかけて収集した書籍およそ一万五千点が平櫛弘子氏より寄贈されたと言う。大型の美術書や装本など幅広い分野にまたがり集められている。なお、田中が祝世禄の墨跡をどういった経緯

で入手したのかは不明である。

(31) 寿序は本来、寿を祝う序文であり、朱子範という人物の七十歳を祝う序文と考えられるが、一五九九年の時点で七十歳を迎えた朱子範については未詳。

(32) 杉田三郎助編『雲烟供養図録』首巻・上巻・中巻・下巻(一八八〇)のうち、本作は上巻の十一葉裏に掛幅として載る。なお、如意の題は六葉裏と七葉表に見え、十一葉表には本作が床の間に掛けられた様子を描いた挿図がある。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/849440/1/1>(二〇二五年三月十日最終閲覧)。

(33) 前掲註(5)参照。

(34) 東京文化財研究所の「売立目録作品情報」データベースで「祝世禄」と検索すると二十一件該当し、『下村正太郎氏御所蔵品目録』第一回(東京研番号:美研-0125)の目録はそのうちのひとつ。

(35) 大丸二百五十年史編集委員会編『大丸二百五拾年史』(大丸、一九六七)二六六頁参照。明治四十三年十一月二十日の欄には「大丸下村家にて、蔵書を早稲田大学へ寄贈せんと申出たるに付、検別の為、今朝京都へ着す。午後より下村家に至る。明後日より書画骨董を発売すると混雑中也。自ら書庫に入り、検索数時間、四十箱ほど運び出す。(以下略)」と記載があるという(市島謙吉氏の日記は未見)。

(36) 東京美術倶楽部百年史編集委員会「美術商の百年―東京美術倶楽部百年史」(東京美術倶楽部・東京美術商協同組合、二〇〇五)六六六頁参照。

(37) 野村得庵翁伝記編纂会編『野村得庵』本伝下(野村得庵翁伝記編纂会、一九五二)一～十頁(第十五章「野村銀行創立」の一「祝世禄」参照)。

(38) 野村得庵翁伝記編纂会編『野村得庵』趣味篇(野村得庵翁伝記編纂会、一九五二)三三三・四三三・四四〇頁などを参照。

(39) 『書苑』四巻第五号(法書会、一九一四)参照。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2732717/1>(二〇二五年三月十日最終閲覧)『群芳清玩』第一冊(清芸出版合資会社編集・発行、一九二一)頁数記載なし。大阪市立美術館編『開館記念名宝展観図録』(便利堂、一九三六)参照。『書苑』四巻第五号(法書会、一九一四)参照。

(40) 山田永年著『過眼余唱』(一八八一)第二集二十九葉表～三十葉表参照。早稲田大学図書館 古典籍総合データベース https://www.wul.waseda.ac.jp/kofenseki/html/ch03/ch03_03680/index.html(二〇二五年三月十日最終閲覧)

【主要参考文献】

- 岡本黄石著ほか『明治漢詩文集』六十二（筑摩書房、一九八三）
小川後楽著『煎茶器の基礎知識』（光村推古書院、一九八六）
成田山書道美術館監修『近代文人のいとなみ』（淡交社、二〇〇六）
鈴木洋保・弓野隆之・菅野智明編『中国書人名鑑』（二玄社、二〇〇七）
成田山書道美術館編『日本の書 維新〜昭和初期』（二玄社、二〇〇九）
曾布川寛監修・関西中国書画コレクション研究会編『中国書画探訪』（二玄社、二〇一一）
高橋利郎著『近代日本における書への眼差し―日本書道史形成の軌跡』（思文閣出版、二〇一一）
野村美術館学芸部編『野村得庵の文化遺産』（思文閣出版、二〇一三）

【工具書】

- 南承祚・黄華編『中国歴代書画家刻家字号索引』（人民美術出版社、二〇〇二）
西林昭一著『中国書道文化辞典』（柳原出版、二〇〇九）